

3 大学国際ジョイント・セミナー & シンポジウムの更なる発展を目指して

花 見 槇 子¹

Toward the Further Development of The Tri-University International Joint Seminar & Symposium

HANAMI Makiko

〈Abstract〉

The Tri-University International Joint Seminar & Symposium was set up in 1994 based on the agreement among Mie University, Chiang Mai University, Thailand and Jiangsu University, China. The three universities take turns to host the annual event in which participating students present articles under the themes Population, Food, Energy and Environment. They also participate in various international exchange activities.

In this article, the history of the event is reviewed in three periods: a. Early Creation Period, b. Expansion Period and c. Transition Period toward the 2nd Stage. Further, the issues and problems in the third period are discussed in order to make the 2nd Stage come true.

キーワード：国際教育集会、3 大学、継続的テーマ、論文発表、人材育成

はじめに

三重大学、チェンマイ大学及び江蘇大学の合意に基づく創設以来、16 年に渡って継続されてきた 3 大学国際ジョイント・セミナー & シンポジウム（以下本稿では、3 大学ジョイント・セミナーまたは単にセミナーと略称する）の骨格は以下のようにまとめられよう。

- 1) 3 大学が、毎年、三重大学、チェンマイ大学、江蘇大学のローテーションにしたがってホストを務めてセミナーを開催する。
- 2) 標準的会期は、10 月後半から 11 月初旬にかけての期間の中で、4 日間（参加者の到着日と出発日を除く）とする。
- 3) ホスト大学は、他の 2 大学からそれぞれ 15 名を招待し、最寄りの国内空港到着時から出発時までの滞在費を負担する。

¹ 第 13 回から 16 回まで、三重大学の 3 大学国際ジョイント・セミナー & シンポジウム実行委員会委員長を務めた。

4) セミナーは毎回、Population、Food、Energy、Environment という地球規模の問題をテーマとして取り上げ、発表者はひとつのテーマの下でトピックを選び、論文を執筆提出し、パワーポイントを使った発表を行う。

5) セミナーは、参加学部学生、大学院生及び教員に、学術会議の形式に則った研究発表の機会を与え、同時に、先進科学技術を導入した地元の工場見学等の学外研修を行う。

6) ウェルカム・パーティやフェアウェル・パーティなどの交歓の場を設け、学生の自主性を喚起する国際交流活動を推進する。

7) 3大学ジョイント・セミナーの公用語は英語とする。

以上の骨格から明らかな創設者の意図は、三重大学の学生に地球社会を維持していくための基本的課題に対して目を向けさせ、その解決に向けて海外、特にアジアの学生たちとのコミュニケーションをはかり親睦を深めながら進めていくことによって、将来、国際的に活躍できる人材の養成を目指す、ということに集約されるだろう。

また、3大学の参加者のうち（15名×2大学＝30名）の滞在費を毎回ホスト大学の負担としたのは、創設時、アジアの中で日本が科学技術的にも経済的にも優位にあって、開発途上国からの学生の参加は容易ではなかったこと、その中で、日本の進んだ科学技術を見聞する機会を彼らに与えたいとの熱意であったと聞く。と同時に、3大学が対等な立場に立ってホストを務めることにより、日本人学生もタイや中国に代表されるアジアの大学を知り、その社会に目を開く機会を持ったことの意義は大きい。

さらに創設者は、このセミナーを単なる国際交流や親睦に甘んじることなく、学術会議の基本形を導入し、英語によるプレゼンテーションを学部生と大学院生を問わず参加学生全員に課したことは、創設当時として極めて先進的であったと言えよう。また、4つのテーマをめぐる、参加学生たち全員に多国籍グループでの討論やワークショップなどを経験させる試みにも、テーマへの関心を深めさせようとの意図がうかがえる。

英語によるコミュニケーション力の十分ではない学生にとっては苛酷とも言えるプログラムであるが、彼らが肩の力を抜き、若さを爆発させて楽しむ機会を用意することを忘れなかったこともこのセミナーが長続きした要因のひとつなのではないだろうか。

本稿ではまず、国際交流センターに残されているプロシーディングスやプログラムなどの諸資料に基づいて、これまで16回に渡って開催されてきた3大学国際ジョイント・セミナー＆シンポジウムの変遷を辿ってみたい。その上で、過去の伝統を継承しながら、21世紀にふさわしい新しいセミナーのあり方と、その実現に向けての課題を明らかにしたい。

1. 創世期（1994 年～1999 年）：文字通り 3 大学間のイベントであった時代

3 大学ジョイント・セミナーは、1994 年に、伊藤信孝名誉教授（当時、生物資源学部教授）と加藤征三名誉教授（当時、工学部教授）の二人を中心に、協定大学であったチェンマイ大学（タイ）と江蘇理工大学（中国）と共に創設された。3 大学間の合意により、翌 1995 年には第 2 回目がチェンマイ大学で、そして 1996 年には第 3 回目が江蘇理工大学で開催された。以降、3 大学ジョイント・セミナーのホストは、このローテーションで今日まで 1 年も欠かすことなく開催されてきた。

セミナーは、その第 1 回より、Role of Asia in the World を課題として掲げ、その下で、Population, Food, Energy, Environment² という地球規模の問題をテーマとしている。

4 日間（到着日と出発日を除く）という短い会期でも参加者が一堂に会することの目的と意義を、創設者は、1) 学生や若手研究者が共通の課題について互いに知識を供給し、個々の独創的思考を紹介することを通して共通認識と相互理解を得る、2) 将来、それぞれの国で指導的役割を担う有望な人材の育成をはかる、3) 戦争抑止、危機回避の土壌育成の役割を果たす、といったところに置いた。

また、このイベントがセミナーとシンポジウムを同時に掲げているのは、セミナーを学生の発表の場とし、シンポジウムを若手研究者の発表の場として、セミナーの実行委員長を伊藤名誉教授が、シンポジウムの実行委員長を加藤名誉教授が担当している。参加者は、そのどちらかに参加するのではなく、両方に出席することが求められた。そのために、第 1 回目では、ふたつのセミナーとふたつのシンポジウムが交互に開催された。³

第 1 回の参加者数は、チェンマイ大学と江蘇理工大学からはそれぞれ教員が 2 名と学生が 10 名ずつ⁴であった。

会期を通して、参加者はアカデミックな活動にのみ追われたわけではなく、到着日にはバーベキュー・パーティ、一日目には学長主催によるウェルカム・パーティ、二日目には研究室訪問と日本鋼管の工場見学及び工学部長主催のパーティ、三日目には生物資源学部長主催のフェアウェル・パーティが行われて、交流の機会も毎日あり、4 日目には午後には大阪に行き自由時間を楽しんだ後ホテルに 1 泊して翌日に帰国している。

² 4 つのテーマは個別に存在するのではなく、ひとつの連環をなしている。すなわち、地球全体の人口増加により食糧増産が必要となり、食糧増産のためにはより多くのエネルギーを費やさねばならない。そして、エネルギー消費が増えると環境問題が発生する。

³ ちなみに Seminar 1 は、Population, Food, Energy and related problems について、Seminar 2 は、Environment and related problems について、Symposium 1 と 2 は、Energy, Power and related topics について発表・討論された。

⁴ 江蘇理工大学は、セミナー参加者 12 名の他に、8 名の教員による調査団を派遣している。

チェンマイ大学で行われた1995年の第2回のセミナー及び江蘇大学で行われた1996年の第3回セミナーは、基本的には第1回のセミナーの形式を踏襲して行われたようである。

1997年の第4回は再び三重大学がホストの番で、会期を1日延長し5日間で開催された。この回では、学生のセミナーと若手研究者のシンポジウムの分離はなされず、Seminar and Symposium I, II, III, IVが開催され、5つの基調講演と39の口頭発表、及び最後に4つの特別講演が行われた。

また、初日に研究室訪問を含むキャンパス・ツアーと顔合わせパーティが開かれ、二日目はウェルカム・パーティ、三日目の午後には三翠ホールで三重大学アート・フェスティバルが開催されて、3カ国代表団の文化披露もその中で行われた。次いで、四日目は、天理市にあるシャープのR&Dセンター及び古都奈良の観光、夕食は津市に戻って会席料理がふるまわれた。さらに五日目の午後には本田技研の工場や鈴鹿サーキットの見学も行われた。

参加者数は、チェンマイ大学が教員6名と学生10名、江蘇理工大学が教員10名と学生5名、三重大学は、口頭発表者が17名（タスマニア大学出身の大学院生1名、ミシガン州立大学の外国語教育センターのアシスタント・ディレクター1名、ネパールの植物病理学者1名、AITの教授1名を含む）、全学部を代表する教員8名による実行委員会（内3名は基調講演や特別講演を担当）、工学部8名、生物資源学部6名から成る学生実行委員会であった。

チェンマイ大学で開催された1998年の第5回セミナー、江蘇理工大学で開催された1999年の第6回セミナーについては、会期はいずれも4日間であり、その他何か新しい試みがなされたかどうかは、プロシーディングスからは伺えない。

以上、1994年から1999年にかけての創世期の3大学国際ジョイント・セミナー＆シンポジウムは、文字通り3大学間で行われ、学生のための研究発表機会としてのセミナーと学生の範たるべき教員の研究発表が行われるシンポジウムという構成の意図が保たれていた時期であったと言えるだろう。

2. 拡大期（2000年～2005年）：参加大学数が増加する時代

2000年の第7回セミナーにおいて、参加大学は、タイの4大学（チェンマイ大学、カセサート大学、コンケン大学、スラナリー工科大学）、中国の3大学（江蘇理工大学、広西大学、無錫輕工大学）そして三重大学と一気に8大学に増加する。よって、海外から

5 パキスタンからのゲスト1名を含む。

の参加者数総勢 58 名（教員 24 名⁵、学生 34 名）となり、迎える三重大側は、論文発表者 10 名（教員 1 名、学生 9 名）、副学長を委員長とする全学的運営委員会（教職員 15 名で構成）と学生実行委員会 35 名（学生発表者 6 名を含む）の合計 54 名であった。

この回まで、運営委員会のメンバーである伊藤名誉教授と加藤名誉教授には、それぞれ Seminar Chairperson, Symposium Chairperson の役名がついており、4 日間の会期中、3 回の Seminar & Symposium が行われた。また、参加者の増加への対応策と推測されるが、ポスター・セッションが初めて導入された。

一日目の Seminar & Symposium I では、教員による 3 つの基調講演に始まって、エネルギー問題をテーマとする口頭発表（15 分）が 3 件（内 1 つは教員による）、そして一人 3 分以内の口頭発表に始まるポスターセッション（学生 5 名ずつ 30 分間×2）が行われた。

二日目の Seminar & Symposium II には、午前中に、環境問題をテーマとする口頭発表が 3 件、エネルギー問題に関するポスターが 8 件、環境問題に関するポスターが 2 件発表され、午後には、環境問題をテーマとする口頭発表が 4 件、食糧問題をテーマとする教員による口頭発表が 3 件、環境問題をテーマとするポスター発表が 10 件行われた。

三日目は、日本鋼管とパイロット・インクの工場見学及び伊勢神宮内宮とおかげ横丁の観光に費やされた。なお、初顔合わせパーティ、キャンパス・ツアー、ウェルカム・パーティ、フェアウェル・パーティ等も従来通り行われた。

四日目の Seminar & Symposium III では、環境問題をテーマとする教員の口頭発表が 1 件、人口問題をテーマとする学生の口頭発表が 2 件行われ、最後にポスター発表が 10 件（環境問題が 3 件、食糧問題が 5 件、人口問題が 2 件）行われた。

このセミナーでは、これらの発表の他にいくつかの新しい活動が導入されている。二日目の夕方には、Evening Seminar として、三重大の教員 2 名がそれぞれ Japanese Culture and Its Way of Thinking, Asian Culture and Its Way of Thinking と題して 30 分ずつ講演している。それに続いて、Communication Plaza なるものが三翠ホールを舞台に 1 時間半に渡って行われている。また、最終日の午後には、The Joint Seminar Summit 2000 と称する企画が 3 時間に渡って行われている。プロシーディングスに載っている説明によれば、これは “Duty and Responsibility of the Students in the International Society towards the 21st Century” と題する討論会のようで、40 分ずつ、3 つのセッションが行われた。それぞれのセッションのトピックと目的は以下の通りである。

Session 1: Mutual Understanding of Cultures, Customs, Lives and Views

文化、週間、生活、考え方等の討論を通して、お互いの偏見を減らし相互理解を深める

Session 2: Duty and Responsibility of the Students in the International Society

towards the 21st Century

学生の義務や責任の討論を通して、地球社会に対する個人の意識を高める

Session 3: Tri-University Program and its Further Promotion in the Future

このイベントの問題点やその改善についての討論を通して、21世紀を担う学生にとって、このイベントがより効果的で印象的なものとなるようにする

セッションの議長は2名の日本人学生が務め、参加各国から選ばれた3名が最後にコメントイターとなる。

あまり討論に慣れていない参加学生たちにとって、これは相当 challenging な企画であったと思われる。そこで、討論を進めるための手がかりとして、あらかじめ簡単なアンケート調査が行われたようである。質問項目は3つで、どうやらそれぞれのセッションに対応している。

Q 1: What kind of things do you want to ask foreign students? (List up 10 questions)

Q 2: What are the key words for making action in the International Society? (List up 3 key words)

Q 3: What is your main purpose for joining the Tri-University International Joint

Seminar & symposium? What kind of things do you perform through this event?

実際にディスカッション・セッションがどのように進行したか、どのような結果を残したかについては残念ながら記録が残っていない。

最後に、この回で初めて、参加大学の教員による代表者会議 (Key Persons' Meeting) がプログラムに掲載されている。

チェンマイ大学は、2001年に、三重大学の他に、中国から江蘇大学⁶、広西大学、河南大学の3大学を、タイからは、カセサート大学、コンケーン大学、スラナリー工科大学の4大学を招き、9大学をもって第8回セミナーを開催した。

翌2002年には、江蘇大学がホストとして、三重大学、チェンマイ大学、カセサート大学、コンケーン大学、広西大学、河南大学を招き、7大学で第9回セミナーを開催した。

2003年の第10回セミナーでは、参加大学数がさらに増加した。ホスト大学である三重大学は、タイからは2000年度と同じ4大学 (チェンマイ大学、カセサート大学、コンケーン大学、スラナリー工科大学) を招いたほか、インドネシアからボゴール農科大学を、韓

⁶ 2001年8月に江蘇理工科大学は、医学部、教育学部等を加え、名称を江蘇大学と改めた。

国から東国大学と梨花女子大学を、フィリピンからはレイテ州立大学を初めて招いた。そして中国からは、江蘇大学、広西大学、内蒙古工業大学、上海水産大学、河南大学、西安理工大学の6大学の参加を得た。参加大学総数は実に15大学（6カ国）となった。海外からの参加者総数は99名（教員36名、学生63名）である。運営に携わる三重大の教員と学生の人数は下記の通りである。

この時の運営委員会は、副学長を委員長とし、5学部の国際交流委員長と留学生センター代表教員で構成された。実行委員会は、伊藤名誉教授を委員長、加藤名誉教授を副委員長として、工学部と生物資源学部の教員8名から成っている。学生実行委員会も、人文学部生が8名いる他は、51名が工学部生か生物資源学部生である。

今回のプログラムの第1の特徴は、4つのシンポジウムと7つのセミナーから構成されていることである。シンポジウムはすべて教員の基調講演（全部で13）から成り、セミナーは全部で69の口頭発表を2室に分けて同時進行で行った。シンポジウムとセミナーのそれぞれと4つのテーマとの関連性は明らかではない。

第2に、4日間の会期中、毎日午後にはワークショップが設けられており、特に3日目のワークショップは、Key Persons' Meeting と同時並行で進行した。

第3に、海外からの学生参加者が三重大大学の授業に参加する、というプログラムが導入された。学生たちは7、8名ずつのグループに分かれ、最終日の5、6限に行われた7種類の授業に参加した。

その他の交流活動として、顔合わせパーティ、ウェルカム・パーティ、フレンドシップ・プラザ、工場見学、フェアウェル・パーティ等が適宜配置されている。

2004年に第11回セミナーを開催したチェンマイ大学は、三重大大学、江蘇大学、広西大学、河南大学、ボゴール農科大学、カセサート大学、コンケーン大学、スラナリー工科大学の他に、バングラデシュ農業大学とラオス国立大学を初めて招き、参加大学は11大学であった。また、2005年度第12回セミナーのホストである江蘇大学は、チェンマイ大学、コンケーン大学、スラナリー工科大学、広西大学、バングラデシュ農業大学、ボゴール農科大学を招き、8大学で開催した。

3大学ジョイント・セミナーは、創設期の第1回と第4回、拡大期の第7回と第10回を伊藤名誉教授、加藤名誉教授の研究室を中心に三重大大学で開催した。この間に、セミナーは両教授のリーダーシップの下で、定着・発展する。すなわち、セミナーは、3大学間だけに留まらず、ホスト大学がその協定大学に参加を呼びかけることによって拡大した。また、理系学部の、それも特定の研究室に偏りがちだった参加者が拡大し、文系学部の学生

や教員にも参加が呼びかけられるようになった。

3. 過渡期 (2006 年～2011 年) : 12 年間の遺産を総括し、新たな道を切り拓く

2006 年の第 13 回セミナーは、三重大学がホストを務めるセミナーの新たな出発点であった。2004 年 4 月 1 日より始まった国立大学法人化の中で、2005 年 10 月から留学生センターが国際交流センターに改組され、翌 2006 年の第 13 回 3 大学ジョイント・セミナーは国際交流センターと国際交流チームを中心に各学部代表で構成される実行委員会方式により、実質的な全学的催しとして企画運営されることになった。なお、実行委員会の上部組織として、国際交流担当理事兼副学長を委員長とし、国際戦略室員及び部局長をメンバーとする運営委員会が組織され、セミナーの基本方針や実行委員会の承認、資金調達等を担当することとなった。

第 13 回 3 大学ジョイント・セミナーは、これまでで最大規模のイベントとなった。三重大学を含め 10 カ国 23 大学からの参加 (海外からの参加学生 81 名、教職員 34 名、三重大からの参加学生 15 名、教員 3 名、実行委員会メンバー 15 名、学生実行委員会メンバー 15 名、ボランティア学生 40 名) を得て 2006 年 10 月 30 日から 11 月 2 日までの 4 日間に渡って開催された。

国際交流基金からの出資額は 1000 万円であり、チェンマイ大学と江蘇大学以外の大学からの招待者 (滞在費三重大負担) もこれまでで最大規模 (74 名) に上った。

また、文系の学生、教員の参加拡大を促進するために、伝統的な 4 つのテーマに、Culture と New Frontiers という二つのテーマが付け加えられた。

大胆なデザインが人目を引くポスターが学内随所に張り出され、セミナー専用のロゴも策定された。

本田技研への学外研修、学生ワークショップが行われ、国際交流活動面では学生実行委員会が大活躍して、一夕、山翠ホールの舞台いっぱい各国の芸能が披露され、その翌日には学生たちが小グループに分かれて市内探訪と夕食に出掛けた。

会期中 3 日目の午後に Organizers' Meeting が運営委員長主催の下で、全参加大学の代表教員と三重大学実行委員会が出席して開かれた。このミーティングで話し合われ、確認された事柄は以下のようなものだった。

- 1) 3 大学を中心に International Organizing Committee を組織し、セミナーの発展について検討していく。
- 2) セミナーのホスト大学を増やすこと : 3 大学が、それぞれ co-host を持つことは構わないが、3 大学の他にホスト大学を増やし、4 大学、5 大学となっていくことに関しては、

基本的な合意は得られたものの、具体案はなかった。

3) セミナーの名称について1: もしホスト大学が3 大学以上に増加したとしても、名誉ある創設大学としての「3 大学」を名称に残した方がよいという意見が、3 大学以外の参加大学代表教員から積極的に出された。

4) セミナーの名称について2: 近年のセミナーが、学生の口頭発表を中心として教員の基調講演や発表を加えた複数セッションで構成されるようになり、シンポジウムの実体が薄れてきたため、名称をセミナー & シンポジウムとする意義が問われたのに対し、本来セミナーは学生の発表の場、シンポジウムは教員の発表の場として作られたことが創設者から説明され、変更しないことになった。

5) 三重大にサーバーを置く国際ウェブサイトを立ち上げ管理する

6) 今回三重大がロゴを策定したが、これを3 大学ジョイント・セミナーのロゴとして継続して使って行くかどうかについてはさらに検討を要する

7) 次年度、チェンマイ大学が、コンケン大学及びメー・ファー・ルアン大学と共同でホストを務めることを提案し、承認された。

8) 最後に運営委員長より、a. ホスト大学は、このセミナーを全学的な催しとして企画運営すること（一部の学部には片寄らないこと）、b. 近年、緊縮財政の中で予算を確保することが困難になっている状況に鑑み、ホスト大学を増やすことや共同ホスティングについて真剣に検討すべきこと、c. プロシーディングスはCD-ROMで配布すること等が提案・承認された。

第13回ジョイントセミナーの終了後、運営委員会が開かれ、席上、セミナーの収支決算が報告された。三重大国際交流基金から計上された1000万円の予算は、全額消費されることなく、200万円余の残額を出して基金に返還されたが、自費参加者の会議登録料を含む全体予算の約8割が参加者の宿泊代と飲食代に費やされたことについて、国際学会や研究集会の通例ではあり得ないこととして、手厳しい批判が出された。3 大学ジョイント・セミナーを続けていくに当たって、ホスト大学が、他の2つの創設大学から15名ずつを招待し、さらに今回のように、他の協定大学に対しても招待枠を設け、滞在費を負担するというやり方を根本的に見直す必要に迫られたのであった。

2007年はチェンマイ大学で、翌2008年は江蘇大学で開催、三重大は、やはり実行委員会を結成して参加学生の公募と英語での面接による選考を行った。

第16回3 大学国際ジョイント・セミナー & シンポジウムは、第13回セミナーの反省を踏まえて、国際交流基金からの予算は500万円、滞在費を三重大が負担する招待者は、

チェンマイ大学、江蘇大学に関しては従来通りの15名ずつ、その他の協定大学の招待人数は大幅削減（12大学19名）、さらに会期を1日短縮して3日間（海外からの参加者の到着日、出発日を除く）で行うこととした。全体として、予算削減に対応しながら質の向上を目指すセミナーであった。

第16回セミナーでの新しい試みは以下の通りである。

1) 新しいテーマ

4つの基本テーマに Communication を加え、5つのテーマを掲げた。さらに、初回より前回まで一貫して保ってきた統一テーマの Role of Asia in the World を For the Global Sustainability に変えた。

2) 口頭発表時間の制限

口頭発表を学生に限定し、ひとり10分間ずつ、質疑応答は一切行わない。

3) ポスター・セッションの導入

3日とも、口頭発表セッションが終わった後に、その日の口頭発表者は自分のポスターの横に立ち、参加者と質疑応答を行う。これは、3日間に短縮した会期の中により効率的に口頭発表を組み込むだけでなく、近年、口頭発表に続く質疑応答が形骸化、沈滞化していたため、口頭セッションよりも、インフォーマルで互いに話しやすい雰囲気の中で質疑応答を活性化させるためでもあった。

4) Best Student Presentation Awards の導入

論文と口頭発表の質の向上をはかるため、テーマ毎に、一人の受賞者を選考することとし、審査基準を明確化した。審査基準は、ウェブ上で前もって参加者に分かるように配慮した。

5) 審査方法

5学部から2名ずつ審査委員を出してもらい、5つのテーマを5学部がひとつずつ担当して審査を行う。そのため口頭発表セッションは、これまでほとんどのセミナーに共通していた、テーマを混在させたものから、各テーマ毎に二つずつのセッションにまとめ、審査委員の便宜をはかった。各審査委員は、あらかじめ受け取ったDVDのプロシーディングスの中から審査対象論文に目を通しておき、口頭セッションに出席して発表を聞き、ポスター・セッションにも出て質疑応答を観察したり、自ら質問した上で、審査基準に沿って5段階評価する。各テーマに二人の審査委員の審査結果を総合して、審査委員10人全員が揃う審査委員会で、テーマ毎の Best Student Presentation を決定する。

6) 特別講演

3大学ジョイント・セミナーでは、これまで参加大学以外から講演者を招いたことはな

い。今回初めて、Environmental Education and Research Institute of ECO ASIA, Mongolia 学長であり、Mongolian National Academy of Science 会長であるアディヤスレン博士による“University Education for Global Sustainability”と題する特別講演が行われた。⁷

7) 基調講演

三重大が2つ (Population と Communication)、チェンマイ大学 (Energy)、江蘇大学 (Food) がそれぞれ1つずつの4つに限定した。その他の参加教員はポスター発表にのみ加わることができる。

8) パーティその他の活動

パーティは、到着日の夕食レセプション、初日のウェルカム・パーティ、最終日のフェアウェル・パーティだけに絞った。学外研修は、シャープ亀山工場と関宿にしたが、ワークショップは行わなかった。

9) Organizers' Meeting

3年前のミーティングでは、ホスト大学を増やす、名称を変更するといった提案を試みたものの、具体案に欠け、根回しもせず多くの参加大学代表たちとの会議を行ったため、三重大として満足の行く結果はえられなかった。そうした苦い経験に鑑み、今回は、チェンマイ大学と江蘇大学に事項書を前もって送付することにしていたが、準備の都合で遅れてしまい、出発前に十分に検討してもらうことは無理だった。そこで急遽、初日の午後に両大学代表団と予備会談を開き、議事内容を説明し、率直な意見交換の結果、基本的な賛同を得ることが出来た。本番のミーティングは、3大学と新たなホスト大学候補として事前折衝を行ってきたボゴール農科大学の4大学間で進めた。オブザーバーとして、4大学を取り囲むように席を占めたその他の参加大学には、最後の自由討論の中で発言の機会を提供した。

なお、ミーティングの議事録は、セミナー後に三重大が立ち上げたメーリング・リストを通じて、チェンマイ大学、江蘇大学、ボゴール農科大学に送付された。今後このMLは、4大学による実質的な International Organizing Committee の意見交換の場となることが期待される。

4. 新たな発展へ向けて

3大学ジョイントセミナーは、三重大にとって今や貴重な教育的財産である。このよ

⁷ 緊縮財政のなかで運営された今回のセミナーが世界的に活躍する同博士を招請する予算を捻出することは到底不可能であったが、セミナー最終日の翌日に行われた環境シンポジウムの主催者であり、セミナーの実行委員の一人でもある人文学部朴教授の計らいで実現に至ったものである。

うな国際教育集会を16年の長きに渡って続けてきたのは、日本の大学の中では三重大学の
みであろう。その礎を築いた二人の名誉教授の功績は非常に大きいと考える。しかし、そ
の新たなステージを創り出すのは次世代の責任である。以下、今後の発展に向けての目標
や課題を整理する。

1) 世界の高等教育界が注目する国際教育集会を目指す

これは、第16回セミナーの Organizers' Meeting の事項書のトップに掲げた今後のセミ
ナーの方向性であり、予備会談および本会談を通じて合意されたものである。このセミナー
は、アジアの枠内に留まらず、世界に向けて発展し得る基盤を持っていると考える。今後、
一国一大学主義でホスト大学をアジア以外の地域から募ることも積極的に推進すべきであ
る。

2) 特色の堅持：他の類似の国際集会等との差別化を明確にする

Population, Food, Energy, Environment の4つの基本テーマは、創設者が21世紀の地
球社会の課題を見通して設定したものであり、今日、少しも時代遅れになってはいない。
この4テーマを堅持することと、ホスト大学の権限において、ひとつないしふたつのテー
マを付け加えて、文系、理系を問わず、多くの専門分野の学生が参加できる体制を維持す
る。したがって、専門分野毎に結成される一般の学会とは異なること、学部学生から大学
院生までが参加できることを忘れてはならない。

3) 質の向上をはかる

さまざまな専門分野の学生が参集し、 $4 + \alpha$ のテーマの下でさまざまなトピックの論文
発表が行われる集会の質を向上させることは容易ではない。第16回セミナーでは、その
最初の試みとして Best Student Presentation Award をテーマ毎に設け、審査基準を明確
化したことは前述の通りである。5項目の審査基準のうち、オリジナリティ（発表者自身
のアイデアや方法論の工夫等）、ロジック（聴衆に理解できる論理的な展開）、パフォー
マンス（聞き取り易い発音・スピード、適切な語彙、理解を助ける PPT スライドの出来
栄えと使い方等）は、一般の学会や教育集会等の審査基準にも該当すると考えられるが、
他にこの催しに固有の審査基準を2項目設けた。それは、論文や口頭発表の冒頭において、
テーマと発表者のトピックの関連性を明確に説明すること、及び、さまざまな専攻分野か
らの参加者にも理解できるように、論文の表現や発表の仕方に工夫すること（出来る限り
平易な表現を使い、特殊専門用語はその意味を説明して使うこと）である。この2点が、
単なる学会発表とは違って、参加者間のコミュニケーションを円滑にし、この教育集会の
効果を上げるために必要な基準であり、独特の配慮である。これらの審査基準が今後、参
加者及び関係者に周知され、基準に照らして優れた論文と発表が増加することが期待され

る。

また、各大学の参加学生は、その出身大学において選考され、大学を代表してセミナーに臨むこと、論文作成や発表の準備に当たっては必ず教員の十分な指導を受けることが、今回の Organizers' Meeting において確認された。

4) 名称の変更

今回の Organizers' Meeting において、ボゴール農科大学が新たにホスト大学に加わることが承認されたことにより、イベントの改称問題も現実的課題となった。三重大がホストを務めた第 16 回セミナーは 6 回目のローテーションの始まりであり、来年度はチェンマイ大学、再来年度は江蘇大学と続く。ボゴール農科大学がホストに参入するのはその次、したがって 2012 年度の予定である。したがって、セミナーの第 2 ステージにふさわしい名称を考案するのに 1 年有余の時間がある。

セミナーの改称については、すでにチェンマイ大学工学部のアカチャイ・サングイン教授が、第 10 回セミナーのプロシーディングスへの寄稿文において示唆している。同教授は、3 大学ジョイント・セミナー創設以来の 10 年を振り返り、セミナーが 3 大学間の催しから拡大しつつあることを踏まえて、セミナーの目的、どこまでどのように拡大させるのか、セミナーの名称やテーマ、ホスト大学の決め方、セミナーの諸活動の 5 点に渡って再考すべきであると述べている。(Sang-in 2003) また、創設者である伊藤名誉教授も、翌年第 11 回のプロシーディングスへの特別寄稿文の結論部分において、“the name of the program may be renewed to be fitted with the real situation” との見解を表明しておられる。(Ito 2004)

問題は、セミナーの実体を表し、覚え易く親しみの持てる名称を誰が考案するかである。

5) 三重大生の英語によるコミュニケーション力の向上

これまで 5 回に渡ってセミナーを実見してきた筆者は、三重大生の平均的英語力がチェンマイ大学や江蘇大学の学生たちのそれと比べて、同等あるいはそれ以上とは言えないとの印象を受けている。研究・教育力においては決して引けを取らない三重大の学生が、英語力の乏しさゆえに参加を躊躇したり、論文作成や発表準備に辛酸をなめ、会期中も海外からの参加学生たちとの活動においてなかなかリーダーシップを発揮できないとしたら問題である。

そこで、実行委員会は、応募者に 200 語程度の abstract (英文) を提出させ、それに基づいて英語での面接を行っている。また、国際交流センターでは、昨年度より、英語による国際教育科目に、「英語による論文作成演習」、「英語による口頭発表演習」という夏季集中の 2 科目を追加し、セミナー参加学生を優先的に受講させている。

しかし、これだけでは不十分などころか、新たな問題が浮上しているように思われる。それは、単に英語力の問題に留まらず、研究発表の内容の質にも関わる問題であると言える。セミナーは元々、創設者の研究室を核としてセミナーへの参加者を生み出してきた。研究室を挙げて、学生の動機付け、研究指導、論文作成指導、口頭発表資料の作成指導とリハーサルまでが行われ、その中で英語力も身についてきた。こうした研究室体制のバックアップがあってこそ、参加学生たちは能力を伸ばし準備を整えることができたのだと思われる。しかし、近年は、セミナーの全学的な催しとしての認知が広まるにつれて、研究室による強力なバックアップが得られる学生ばかりではなくなっている。

こうした状況を打開するには、基本的には、研究室による研究指導体制、共通教育による英語コミュニケーション基礎力の鍛錬、国際交流センターによる英語論文・発表の総仕上げという三位一体の指導体制の下に、能力と意欲のある学生を一人でも多くセミナーに参加させる努力が必要であろう。

6) セミナーの教育効果を全学に波及させる

過去2回の三重大学でのセミナーでは、開会式に始まって、特別講演、基調講演、閉会式等は三翠ホールで行っているが、海外から100名以上の参加者を迎えても、三重大学からの出席者が極めて少ないため、会場の大半は空席のままである。また、小ホールを仕切ってふたつのセッションを同時進行させているが、これらの部屋にも空席が目立つ。

これまでの会期は確かに後期の授業と重なっており、学生にとっては参加しにくいかもしれない。しかし、それよりも、広報や各教員の指導不足により、学生がセミナーを聴講することにより何が得られるのかを理解できていないのではないか。プログラムの中で発表を選んで聴講してみる、その他の国際交流活動に参加していただくことによって、次のセミナーには自分も参加してみたいと思う学生も増えるだろう。だがそのためには、まず教員の後押しが必要である。わずか4日間の会期とは言え、学内で展開される国際教育交流活動を、より多くの学生たちのみならず教員でさえも無関心のうちにやり過ごしてしまうのはあまりにももったいないのではないだろうか。

8) 予算の確保

これまで3大学間では、毎回、ホスト大学が他の2大学の参加者に対し、各15名分の滞在費を負担することが恒例となっている。各国間の経済格差が大きかったセミナー創設期においては必要な措置であったが、近年、各国の経済力の躍進が目覚ましい中で、これを、6回目のローテーションが終わる2011年度をもって廃止することがOrganizers' Meetingにおいて合意された。2012年度からは、一般の国際学会等の通例に鑑み、参加者は基本的に自費参加となる。ただし、それに替わって、ホスト大学の自由裁量で、参加

者への奨学金や渡航費補助等の経済援助が行われることが、優秀な学生を参加させるインセンティブともなり、セミナー全体の質の向上につながると考えられる。

今回のように会期を3日間に短縮する試みにはやはり相当の無理がある。学生にとってモデルとなるような若手研究者による発表や、学生主導型の交流活動、テーマに沿った討論、ワークショップなどのこれまでも行われてきたユニークな活動を、プログラムに盛り込むゆとりがほしい。

結論として、セミナーは、国際交流基金の取り崩しにのみ依存するのではなく、プログラムの豊富な経験と特性を強調しつつ、外部資金の導入を目指さねばならない。

おわりに

以上、3大学ジョイント・セミナーが16年をかけて築いて来たものと、更なる発展のために解決しなければならない諸課題が明らかになったと思う。また、これらの課題を乗り越え、セミナーの第2ステージを築くことができた時、三重大学は創設者の功績に真に報いることができるのではないだろうか。

参考資料

1. *Proceedings & Program. The Tri-University International Joint Seminar & Symposium 1994.* (Published by Mie University)
2. 伊藤信孝・加藤征三「3大学国際ジョイント・セミナー報告書—さらなる改善のための反省と提案—」1994. 11
3. 伊藤信孝・加藤征三（編）「3大学国際ジョイント・セミナー参加者（学生）の意見—日本、タイ、中国—」1994. 11
4. *Proceedings of the Tri-University International Joint Seminar & Symposium 1996.* (Published by Jiangsu University of Science & Technology)
5. *PROCEEDINGS & PROGRAM. The Tri-University International Joint Seminar & Symposium 1997.* (Published by Mie University)
6. *Proceedings of the Fifth Tri-University International Joint Seminar & Symposium 1998.* (Published by Chiang Mai University)
7. *Proceedings of the 6th Tri-University International Joint Seminar & Symposium.* (Published by Jiangsu University)
8. *PROCEEDINGS & PROGRAM. The 7th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2000.* (Published by Mie University)
9. Sang-in, Akachai (2000) "A Decade and Beyond of the Tri-University International Joint Seminar and Symposium." *PROCEEDINGS. The 7th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2000.* (Published by Mie University)

10. *Proceedings of the 8th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2001*. (Published by Chiang Mai University)
11. Ito, Nobutaka (2001) "Past One Decade of Tri University Program 1994 to 2004." *Proceedings of the 8th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2001* (Published by Chiang Mai University)
12. *PROCEEDING. The 9th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2002*. (Published by Jiangsu University)
13. *PROCEEDINGS & PROGRAM. The 10th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2003*. (Published by Mie University)
14. *Proceedings. The 11th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2004*. (Published by Chiang Mai University)
15. *PROCEEDINGS & PROGRAM. The 12th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2005*. (Published by Jiangsu University)
16. *PROCEEDINGS & PROGRAM. The 13th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2006*. (Published by Mie University)
17. *Proceedings. The 14th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2007*. (Published in CD-Rom only by Chiang Mai University)
18. *PROCEEDINGS. The 15th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2008*. (Published also in CD-Rom by Jiangsu University)
19. *PROCEEDINGS. The 16th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2009*. (Published in CD-Rom only by Mie University)
20. *PROGRAMS. The 16th Tri-University International Joint Seminar & Symposium 2009*. (Published by Mie University)